

「野球の国から」高校野球編

オヤジ激怒「野球やめろ」

谷繁の父一夫は、息子が幼少時から使ってきた野球道具を大切に保管している。広島県庄原市の自宅に谷繁元信 球歴館を造り、ファンにも公開する。

その中で、捕球部分に穴が開いたキャッチャーミットがあった。小学校時代に使っていたものという。しかし、谷繁は小



穴が開くほど使い込まれていた小学校時代のキャッチャーミット

中学を通じて捕手経験はない。江の川に入って初めて転向したはずだ。

【夫】 私との練習で使っていたんですよ。小学生の頃から息子はオールマイティーで、どのポジションもこなせた。キャッチャーにも興味を持っていた。だからミットだけでなく、マスク、プロテクター、レガーズも買い与えて自宅で使っていた。チームの練習には持っていない。親で投手、捕手を交互に務めた。

【夫】 私が投げる時は高め、低め、内角、外角、そしてショートバウンド。いろいろな球を投げて「体で止めにいくんだぞ」とか教えていました。投げる時



谷繁氏の高校時代を振り返る父一夫さん

は「素早く耳の後ろにボールを持っていきなさい」と。穴の開いたミットを見れば、どれだけ使い込んでいたか分かる。共に練習した一夫は、なおさらだ。だから、息子が捕手になったと聞いても驚かなかった。

親子での練習は投球だけではない。一夫は自宅の庭にあったこのぼりを掲げる支柱にタイヤをつけて、打撃練習ができるようにした。トス打撃用にゴルフ練習用のネットをはり、夜でも

シリーズⅠ 追憶

谷繁 元信 4

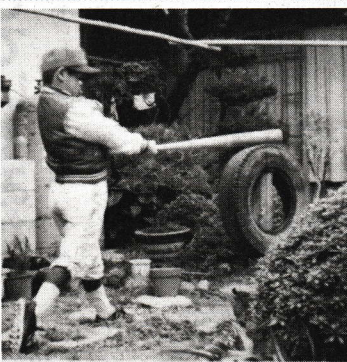
練習できるような300ワットの電気を設置した。中学になると30ワットのバーベルを特注した。息子の練習を全面的にサポートした。

【六】でも、私が練習をやらせたんじゃないかもしれません。私がやらされたんです。私が帰宅すると「キャッチボールやろう」と。本当に野球が好きなんだった。

谷繁は小学2年で東城ストロングボーイズという軟式チームに入った。規約では入団は3年からだが、谷繁少年は練習に行くと球拾いなどを手伝った。そこで特例が認められた。

それだけ野球好きだった谷繁が、野球から離れた時期もあった。谷繁は「小学5年」「中学2年」、一夫は「小学5年」と言う。親子で記憶に違いがあるが、ここでは谷繁本人の証言を紹介する。

【谷繁】理由は忘れたけど、他の生徒とケンカをしてね。殴って、目に大けがをさせてしまった。幸い大事には至らなかったけど、オヤジが怒ってね。「もう野球をやめろ」と言われ、練習に行かなくなった。中学2年の9月から2月ぐらいまで、半年ぐらいじゃないかな。



小学校時代、父一夫さんが自宅庭に設置したタイヤを使つての打撃練習

これが、東城ストロングボーイズで代表を務めていた近藤護の耳に入った。近藤は「野球をやめてはいけない」と言い、一緒に一夫に謝ってくれた。おかげで野球を再開できた。

【六】実は、代表や監督とは裏で話ができていました。本当にやめさせるつもりではなかった。勉強はせんし、言うことを聞かないから、おきゅうをすえるためでした。

広島県比婆郡（現在の庄原市）の豊かな自然と、両親や指導者の愛情に恵まれ、谷繁少年はたくましく育った。

高校時代に話を戻そう。捕手にコンバートされた谷繁だが、1年の夏は「一番一塁」で島根大会に臨んだ。

（敬称略）つづく

【飯島智則】